

① 土地
② 会
③ 毎朝

④ 新聞
⑤ 国歌

2
1 A エ
B イ
C ア

2 海水の三

3 なみだを
4 りく

5 ア
1
イ 2
ウ 2

3
1 A ウ
B ア
C イ

2 エ
3 I ウ
II ア

4 あいか
5 サイアク

6 いったもいっしよに

配点	
①	各2点×5=10点
②~③	各5点×18=90点
<計>100点	

- ① 小学校2年生までに学習した漢字から出題している。①の「土」は「士」に見えないように形に気をつけよう。②「合」と書かないようにしたい。③の「毎」の下の部分を「母」と書かないようにしよう。また「朝」の左側が「くるまへん」にならないように気をつける。④の「新」をうっかり「親」としてしまわないようにしよう。「聞」の中の部分の形にも気をつけたい。
- ⑤の「歌」の五画目と十画目をつなげて一画で書かないようにする。

2

- 1 A (A)の前でウミガメが「なみだを流しているように思える」とあるが、後では「なみだではありません」と書かれていることから逆接の「しかし」がはいる。
- B ウミガメがりくく上がったときだけなみだを流しているように見える理由が (B)の前で説明されていることから順接の「だから」がはいる。
- C (C)の後でウミガメが塩類腺から塩水を出す理由が並べて書かれているので並列の「また」がはいる。(C)の後にある「も」も見落とさないようにする。
- 2 海水ではない。(A)で始まる段落に「からだに入ったよけいな塩分を、目から出している」とあり、次の段落に「からだに入った海水の塩分をこし取ります。そして、海水の三倍もこい塩水にして、目からからだの外にいつも出している」とある。
- 3 ウミガメが「りく」上がったときに塩類腺から水分を出しているようすをたとえたことばである。
- 4 直後に「目がかわくのをふせぐ」とある。水中では目がかわくことはない。では「目がかわく」のはどこでなのかと考える。
- 5 ア 最初の段落にはつきりと「ウミガメは、水中で息ができない」と書いている。
- イ 「一生」ではなく「一度」である。
- ウ 「すべて」というわけではない。

3

- 1 A 「みきちちゃん」にやくそくをやぶられて元気がなくなった「あたし」がかいだんをおりるようすを表すことばである。
- B 「みきちちゃん」とのながかわるくなって、「あたし」の胸がしめつけられているようすを表したことばをえらぶ。
- C まるで「あたし」から「ユカちゃん」を守ろうとするような「みきちちゃん」の立ち方を表すことばである。「すつくと」はまっすぐに立つようすを表すことばである。
- 2 直前に「あたしがくることに気づくと」とあるので、イかエになるが、イの「クラスがべつべつになったから」だけでは「あたし」をさける理由にはならない。これまでなががかかったのに、このごろ「ユカちゃん」とばかりいっしょにいたので、少し気まづくなっているのだろう。
- 3 I 「くつと」が係ることばになる。「ユカちゃん」にぶつかった「あたし」に対して怒りをおぼえているのである。
- II 「くすつと」が係ることばになる。いつもいっしょにいる「みきちちゃん」と「ユカちゃん」のことをばかにしたが、自分もそうだったことに気づいて、おかしくなったのである。
- 4 「みきちちゃん」は「あたし」のことを「ドジ」だと思っていたのであるが、四行前の「もう、あいかかわらずドジなんだから」から「みきちちゃん」が「あたし」のことを「ずつと」「ドジ」だと思っていたことがわかる。
- 5 「みきちちゃん」とのながが決定的にわるくなったことを感じたのである。「あたし」にとっては「サイアク」の展開である。
- 6 「二人でセット」みたいなことを「あたし」は「みきちちゃん」としていたのである。——線①の前に「いつもいっしょにいる」とあった。